



山口信子《習作》1952年 石膏

3体の人体像と、2つの木彫。今回の『買上展』に彫刻科が選んだ作品である。最古のものは1952（昭和27）年買い上げ。以降、順に並べると、59（同34）年、63（同38）年、64（同39）年。73（同48）年作の立像がもつとも新しく、大学美術館に収蔵されてからちようど半世紀の時を経た計算になる。

美術学部の中までもっとも古い歴史を持つ科の出品作選びの基準は、ごくシンプルだった。「古い時代の女性作家から時系列に沿って順番に」。発案者は小谷元彦准教授である。「学科のなかで自分がセレクトをすることが決まり、反射的に決めました。他の学科の選んだ作品を見たら、歴史を定点観測して選ば

「彼女たち」と買上展

彫刻科・小谷元彦准教授はなぜ女性作家を選んだのか？

各科が独自の観点で過去の買い上げ作品から選び、展示する『買上展』第2部。彫刻科が示した作品選択の方針は女性作家の作品を古い順から5点、という明快なものだった。何を思い、そう決めたのか。提案者の小谷准教授に尋ねた。

文＝大谷道子



石澤ミヨ《芽》1959年 木



日高頼子《女》1963年 ポリエステル樹脂

れていた印象だったので、『あれ、違うやり方してしまったかな?』と思ったんですけど」
迷いのないチョイスは、いかにも天才肌らしい———とつい思ってしまうが、その決断の足元には、小谷准教授が抱いていた彫刻の世界、および藝大彫刻科の成り立ちや歴史についての疑問と問題意識が横たわっていた。

客観性と熱を併せ持った作品

「もともと彫刻家には男性が多くて、近代彫刻史に出てくる名前も男性ばかり。僕自身は学生時代、レベッカ・ホーンやエヴァ・ヘス

の作品が好きで女性作家の切り口には興味を持っていたので、藝大の彫刻科にはいつからどのくらい女性がいたんだろう?ということだが、以前からずっと気になっていたんです。だったら、この機会に調べてみよう」と

彫刻科の歴史は、1887(明治20)年の東京美術学校設立と同時に始まる。最初は木彫、その後に塑造が加わって統合され、戦後の1949(昭和24)年の大学組織後、現在の彫刻科に再編された。

女性の受け入れが始まったのは、東京美術学校時代の46(昭和21)年。だが、大学美術

館の古田亮教授を介した調査では、それから3年間の入学者数の内訳については記録が見つからなかった。藝大となって最初の49年には22名の彫刻科新入生のうち女性が3名、翌50年は26名中4名、51年は33名中2名。49年

からの10年間の彫刻科234名の全入学者中では32名で、全体の13・6パーセントを占めている。女性作品初の買い上げ作《習作》をつくった山口信子が入学したのは、東京美術学校時代の最後の年あたりと推測される。

「実物を見る前に写真で見ても、『あ、いい』と思いましたが。いわゆる近代彫刻史に出てくる作品とも少し違っていいし。

この頃であれば、技術的に作り込んだりするんだらうけど、あまり具象的でなく、当時新しかった石膏の直付けという手法を使った、粘り強い作業プロセスを感じる。女性像としても、匿名性が強い感じが興味深い」
確かに、それに続く日高頼子の《女》、鷺崎直子の《立像》にも、具象的というよりは、ど

こか人体、ことに女性の姿を客観視する冷静な視線が感じられる。対して、木彫の2作品、石澤ミヨの《芽》、水谷たきの《作品I》は、素朴な佇まいながら、静かな情熱が伝わってくるようだ。

「彫刻というと、重たくて大きなものを扱うのだから力のある男性のほうが有利なのは？と考える方が多いと思いますが、これには誤解も多分にあつて。要は体の使い方、要領さえよければハンデはないと思います。逆に力があればあるほど、その力を無駄に使つてしまう場合もあります」



水谷たき《作品I》1964年 木

初期女性作家の作品の共通点を探ねると、「どれも、すごく制作への熱を感じます。きれいに整えることよりも、時間をかけて素材と向き合っている雰囲気からも」と小谷准教授。美術界でも、学校内でも、まだ女性が圧倒的にマイノリティであった時代、何を思い、どのように制作に打ち込んでいたのか——彼女たちの在学中のライフストーリーは、残念ながら母校にはあまり伝わっていない。

「美術史家の木下直之さんの本によると、藝大の彫刻科の最初の入学試験では定員割れだったらしいんです。彫刻とはいったい何なの



池田(高橋)カオル《問》1970年 石(多胡石)

※本作は買上展では展示されません

品をつくり、結果を残したことは確かですね」

作品は残る。そして、作品は語り、伝える。その価値と、関わってきた人の歴史を。

「これまでの大学美術館のコレクション展では捉えてこなかった角度で作品を選んでみたかなと思つていた部分があつたと思います。藝大のコレクションが他の美術館と違うのは、学生作品のアーカイブであること。つまりは、埋もれる過去を発掘できる記録性が最も大事。彫刻を志した女性の記録を表に出すことで、次の世代にこの国の芸術のはじまりの手がかりを残すことはできるのかな、と」

か、そのことをまだ誰もわかつていなくて、謎多き芸術だったのでしょうか。そんな時代で、さらに男性が圧倒的に多い環境に飛び込んできたわけだから、かたい決心があつたんだろうなと想像します。でも、彫刻家を目指すこと自体が困難だった時代であつても、こうして作

展示することは、時代に刻印すること

時代は移り変わり、小谷准教授が藝大美術学部彫刻科に入学した91（平成3）年には、女性はその22名中8名。8年後の99年には20名のうち半数の10名、そして2017年には20名中13名と、ついに男女比が逆転する。

「今、学生を指導していても、男女の差は何も感じないですね。僕にとって今回、発見だったのは、こんなに早くから、彫刻科の教授陣が女性の作品を評価していたんだということ。近代彫刻は男社会だったので、その歴史の中心地だった藝大では評価してなかったのだから、正直、疑っていました。でも、

割合としては10パーセントくらいの女子学生の作品をフラットに見て、こうして買い上げ作品を選んでいったんだということが、違う角度から近代を考えるきっかけとなりました。そういう部分も、伝えておきたいです」

小谷准教授の発見には、さらに続きがあった。買上展で展示する5点に加えて、実はもう1点、同時代に買い上げられていた女性作家の作品が発見されたのである。

それは、70年作の池田（高橋）カオルの作品。藝大美術学部で足を踏み入れたことがある人なら、いつか目に留めたことがあるかもしれない。美術学部中央棟1階の中庭的なスペースに長年展示されている石彫だ。

「コロナ禍になる前まではずっと、あの作品が見える部屋で教授会をやっていたんですよ。当時から『誰の、いつの作品だろう？』と気になってはいたんですが……」

静かに佇む作品の題名は《問》。作品と向き合い、彼女たちの存在感が私たちに問いかけるものについて、ひととき心を巡らせる。

「僕たちが作品を見ていたのではなく、実は作品が僕たちを見ていたのかもしれないね」



鷺崎直子《立像》1973年 石膏